

合衆国におけるコミュニティ・スクーリングの現状(2)

ハヤシザキ カズヒコ／レイチエル・ウィンター

本稿は前回に続き、シカゴのコミュニティ・スクール・イニシアチブ(CSI)の特徴を概説し、その後、わたしたちがおとずれたシカゴ市南部の学校を紹介する。

2 シカゴのCSIの特徴

コミュニティ・スクールの評価調査を実施したS・ウォレンによればシカゴのCSIの構造はコミュニティ・スクール連盟のそれを追隨している。一つは成功の指標として学業上のパフォーマンスの向上を強調している点である。テストの点数、出席率、教室の水準の向上、子どもの転校率や退学率の低下などがそれである。もう

一つの類似点は「貧困なコミュニティやマイノリティのコミュニティにおける学びへの多次的な障害をとりのぞく」(Whalen 2007: 4)ことを狙いとしていることである。

連盟のモデルとはちがうシカゴのCSIに特徴的なことは、ステークホルダーの参画であるという。各学校のパートナーとなる民間団体(Lead Partner Agency = LPAと呼ばれる)の果たす役割が大きく、LPAは放課後や休校時での活動にかかわる資金調達や、コミュニティ・リソース・コーディネーターの雇用に責任をもつ。またLPAを通じて新しい意思決定のシステムができあがりつつあるとも言われる。地域学校審議会は人数制限もある公式な会議であるが、今では日々の実践の中で多

くの人々を巻き込みながら全体を見渡す構造が出現している。最後に政策形成に対するL P Aの影響力の強さがある。C S Iの発展に応じて各L P Aが連携協力し、大学とともにシカゴ・コミュニティ・スクール連盟を形成しており、テクニカルな支援や教育プログラムの提供において政策に大きなインパクトを与えるようになってきた(Whalen 2007: 4-5)。

C S Iにおいては、各学校は強力で事情に通じた地域のL P Aとパートナーシップを結ぶことが求められている。そのような成熟した団体が多く存在するのか不思議になるが、二〇〇六年には一一〇の学校のうち八〇%の学校が外部団体をL P Aとしており、L P Aの数は四八団体となっている。L P Aによつては四つも五つもパートナーの学校があるということも珍しくない。

ウォーレンの評価調査によればC S Iの成果は上々であった。二〇〇一年から二〇〇六年にかけて、テストのスコアでいえば他の公立学校との格差をかなり縮めることとなった。子どもの基準点通過率は算数でC S Iの学校が四六・三%の上昇をみせた。他の公立学校も三七・六%も上昇しているが、C S Iの学校の方が上昇率のポイントが八・五%上である。国語でも同様にC S Iの学校が一七・八%の上昇なのに対して、他の公立学校が一

〇・八%であるなど八%の上昇率の違いがある。また学習の雰囲気も良くなっているとどう(Whalen 2007: 42-48)。

3 セザール・E・チャベズ 多文化アカデミーセンター

C S Iの学校の事例をエスノグラフィー風に紹介しておこう。コミュニティ・スクールを見学したいとウォーレンに依頼して連れて行ってもらったのが、セザール・E・チャベズ多文化アカデミーセンター(以下チャベズ小学校)であった。

セザール・E・チャベズは農民の労働組合を指導した偉大なメキシコ系アメリカ人の名前である。アメリカの公立学校ではこのように英語以外の名前を持つ学校も少なくはない。

チャベズ小学校はシカゴ市の南部に位置する。小学校の位置する地域はギャングの関与した暴力や高度な貧困に悩まされているようだ。二、三〇年ほど前からこのあたりはヒスパニック系の移民の集住地域となっており、多くの子どもの第一言語がスペイン語である。二〇〇七年現在では、児童数は九五七人で八九・一%がヒスパニ



写真1 César E. Chávez Multicultural Academic Center の校舎



写真2 セザール・E・チャベズの壁画が校舎の入り口に大きく飾ってある

ック系、五・五%がアフリカ系、二一・〇%が白人である。ヒスパニック系がマジョリティを占めることから、保護者に渡される配布物にはスペイン語の通訳がつき、また教員たちの多くもバイリンガルである。九八・七%の子どもが低所得者層の家庭出身であり、四四・六%は英語能力が不十分であるとされる。

私たちが学校についたときには、すでに四年生までの授業が終わっていたが、多くの子どもたちが学校に残って工作活動や演芸活動に勤しんでいた。これらの活動の一部はチャベス小学校のLPAである「アーバン・ゲートウエー」により運営されている。アーバン・ゲートウエーはいくつかのコミュニティ・スクールと協働しているだけではなく、それらの学校の子ども同士を結びつける機能も果たしている。例えば二〇〇七年の夏には近隣で歩行者天国をつくり、ストリートフェアを行った。そこで各小学校の子どもたちはさまざまなイベントを催したそうである。

私たちに学校を案内してくれたのは、チャベス小に二人いるコミュニティ・リソース・コーディネーターのうち一人、キャシーだ。彼女の責務はコミュニティ・スクール事業を全体的な観点から運営することである。その仕事には、プログラムのためのスタッフを雇用しコー

ディネートすること、使用教室の調整、プログラムが児童の一部に偏っていないかをチェックすることなどが含まれる。彼女たち二人の仕事は校長によって強力にバックアップされている。

チャベス小学校では二〇〇七年にはコミュニティ・アート事業、「放課後は大切である」事業（英語と算数の補習）など、二六週間の放課後プログラムを提供した。コミュニティ・アート事業には、ヨガ、ストリートリング、美術、多様なダンス、パークセッション、演劇、メディアライティング、その他もろもろがある。指導者はLPAのスタッフ、教員、ボランティア、保護者のいずれかとなる。「放課後は大切である」事業には常設の「宿題センター」がある。このセンターは保護者が英語話者でなくとも子どもが宿題ができるようにと設立されたもので、週四日、低学年と高学年とに時間を分けて利用される。このほかに、ガールズクラブ、バスケットボールクラブ、チェスクラブ、バレーボールクラブ、コンピュータ教室などなど、書ききれないほど多くの活動が提供されている。

こうした毎週平日のプログラムのほかに、日曜日にはオープンジムやアドベンチャークラブがあり、年に数回の行事もある。たとえばリテラシーナイトは親子参加の

イベントで、子どもがもつと本を読むために保護者が何をすればよいかを学年別に教えてくれる。家庭やコミュニティに向けては第二言語としての英語教室やコンピュータ教室も開かれている。

多くの行事に教員がかかわっているが、学校はLPAが学校かのどちらかが主導にならないように配慮している。キャシーは「私たちは一緒に動いています。この夜には、お互い別々のことをやったりといった争いがないように」と言う。

医療サービスも民間団体の巡回により行われており、歯医者を含めた検診やワクチン接種など日本の水準の医療サービスは受けられるようだ。公的な医療制度が弱いアメリカでは貧困層が医療サービスを受けられる機会は制限されてしまっているため、基本的な医療がコミュニティ・スクールで提供されることが多いようである。

またコミュニティ・スクールにありがちだが、それぞれの事業の資金調達先は異なっていて、コミュニティ・リソース・コーディネーターたちは助成金の申請にも忙しい。コミュニティ・アート事業の一部では、ある助成により眼鏡を子どもたちに無償提供することができた。キャシーは喜んでいた。

キャシーの言葉では、コミュニティ・スクールの利点



写真3 掲示板の標語「手を携えて効果的な学びのコミュニティをつくらう」

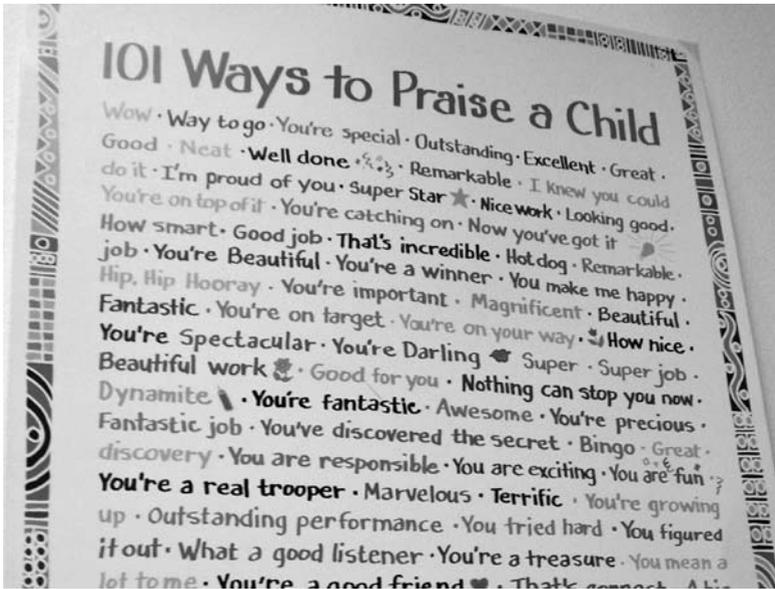


写真4 ポスター「子どもをほめるための101の言葉」

は貧困層の家庭がサービスが無償で受けられることだという。「子どもたちが学校にいればいるほど彼らはゆたかになるんですよ」。ひとり親家庭や共働きの多い貧困層にとっては、保育の提供はまさに基礎的なコミュニケーション開発の手法であるが、ここシカゴでもそれが通用するということであろう。イベントの企画に保護者を巻き込んだり保護者同士のつながりを作ったり、保護者支援にもキャシーたちは活躍している。

もう一つのメリットは学力の向上である。チャベス小学校は二〇〇三〜〇五年の間に、ISATのスコアで一五ポイントも上昇したとしてイリノイ州から表彰を受けた。

四. シカゴ市の取り組み

シカゴ市に似た取り組みとしては、ボルティモアのインシアチブをあげることができる。ボルティモアでは市長がコミュニティ・スクールの熱心な推進者となり、ちかいかい将来すべての学校をCS化するとしている。コーデイナーの雇用に予算が与えられ、LPAを含むあらゆるコミュニティ資源を学校へ導入しようとして試みていく。市長によってBCSC (Baltimore Community School

(Connections) という中間支援組織が立ち上げられ、全米各地からCS設立運営の経験者たちが集められ、ボルティモアのCS化に尽力している。まだ五〇校ほどパイロット地域が存在するのだが、全学校をCS化するという点でシカゴにつづく取り組みである。

シカゴにせよボルティモアにせよ、不利な地域に教育予算が大きくつけられているイギリスとは異なり、アメリカの各学校に配分される予算がかなり少ないことは、学校施設や教員の数と質からも想像できた。また国による福祉や医療の保障がなされるイギリスに対して、アメリカでは福祉や医療サービスが民間にゆだねられている。そこでアメリカのコミュニティ・スクールはLPAといった民間団体（日本でいうところのNPO/NGO）がきわめて決定的な役割を果たすことになる。ここにアメリカのコミュニティ・スクールの一つの特徴がある。同時にLPAへの依存という合衆国的な特徴は、シカゴやボルティモアのように全学校へとコミュニティ・スクールを普及させるときの課題にもなる。ニューヨークに比べて提供サービスが見劣りするものも、LPAがたくさん学校と同時にかわりを持ち、多数の活動の立ち上げに当面エネルギーを分散させられるからである。

学力向上については留保する見方もある。ウォーレン

自身でさえ、たとえコントロールグループとの比較だとしても学力の向上がコミュニティ・スクールによるものなのか、それともその他の教育改革の成果なのかは帰属させるのが難しいともした。例えば、チャベズ小学校では一九九八年にも学力向上で表彰されているが、これはすなわち学力向上しやすい学校の全体的な文化がまずあって、それゆえにCSIなどの取り組みにも積極的に乗り出したのだとも考えられる。コミュニティ・スクールの取り組みそれ自体ではなく、積極的な「can-do」文化を持つ学校だからこそ、学力もあがっているとも考えられなくはない。

しかしながら、現在のブッシュ政権による「落ちこぼれ禁止法」の状況下では、コミュニティ・スクールの推進者たちは目に見える形で成果を産出する必要性に迫られている。たとえ学業以外のニーズにフォーカスを置きたくとも、少なくとも同時に学業のパフォーマンス向上に着目してはならない。ある有力者は「ブッシュがなにかもめちゃくちゃにした」と嘆いたが、逆境ゆえにこそコミュニティ・スクールの推進者たちはそのプレゼンスや効果を宣伝しなければならない立場に立たされてきた。

次回は米国でもコミュニティ・スクール経験の最も古

Children's Aid Societyの支援するニューヨークの学校を紹介しよう。

※本稿は、科学研究費補助金(若手研究(B) 課題番号18730530「英米のコミュニティサービスと学校教育の融合施策に関する比較研究」)により行われた調査にもとづくものである。

注

(1) もっとも私たちの目にはこうした民間団体の果たす重要な役割はニューヨークやボルチモアでも同様だったので、シカゴモデルというよりは合衆国モデルと呼んだ方が良いでしょう。

文献

Whalen, S. P. et al., 2005, *Evaluation of the Polk Bros. Foundation's Full Service Schools' Initiative: Final Report*, Chapin Hall Center for Children: Chicago

Whalen, S. P., 2007, *Three Years into Chicago's Community Schools Initiative (CSI) : Progress, Challenges, and Emerging Lessons*, University of Illinois at Chicago: Chicago

高田一宏 編著

「コミュニティ教育学への招待」

A5判 二二九頁、二五〇〇円(税別)

解放出版社・発売

「コミュニティ教育学」とは、学校と地域・家庭との協働をいかに推し進めるかという今まさに立ち現れつつあるテーマを追究する新しい研究領域である。本書は、気鋭の研究者による「コミュニティ教育学」という語を冠する、日本で最初のテキストであり、本書で紹介される実践例は、日本のなかでも先端的な、地域教育システム構築の試みである。

